

校異源氏物語・ゑあはせ

前齋宮の御まいりの事中宮の御心にいれてもよをしきこえ給ふこまかなる御と
ふらひまでとりたてたる御うしろみもなしとおほしやれと大のは院にきこし
めさむ事をはゝかり給て二条の院にわたしたてまつらむことをもこのたひはお
ほしとまりてたゝしらすかほにもてなし給へれとおほかたの事どもはとりもち
ておやめきゝこえ給ふ院はいとくちおしくおほしめせと人わろければ御せうそ
こなとたえにたるをその日になりてえならぬ御よそひとも御くしのはこうちみ
たれのはこかうこのはこともよのつねならすくさくゝの御たきものともくぬえ
かう又なきさまに百ふのほかをおほくすきにほふまで心ことにとゝのへさせ給
へりおとゝみ給もせんにとかねてよりやおほしまうけゝむいとわさとかまし
かむめりとのもわたり給へるほとにてかくなむと女へたう御覽せさすたゝ御くし
のはこのかたつかたをみ給につきせすこまかになまめきてめつらしきさまなり
さしくしのはこの心はに

わかれ路にそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめしおとゝこ

れを御らんしつけておほしめくらすにいとかたしけなくいとをしくてわか御心
のならひあやになる身をつみてかのくたり給しほと御心におもほしけんこと
かうとしへてかへりたまひてその御心さしをもとけ給へき程にかゝるたかひめ
のあるをいかにおほすらむ御くらゐをさりものしつかにて世をうらめしとやお
ほすらむなと我になりて心うこくへきふしかなとおほしつゝけ給にいとおしく
なにゝかくあなかななる事を思はしめて心くるしくおもほしなやますらむつら
しとも思ひきこえしかと又なつかしうあはれなる御心はへをなと思ひたれ給て
とはかりうちなかめ給へりこの御返はいかやうにかきこえさせ給らむ又御せう
そこもいかゝなときこえ給へといとかたわらいたければ御文はえひきいてす宮
はなやましけにおもほして御返いともうくしたまへときこえ給はさらむもい
となさけなくかたしけなかるへしと人ゝそゝのかしわつらひきこゆるけはひ
をきゝ給ていとあるましき御事なりしるしはかりきこえさせ給へときこえ給も
いととはつかしけれといにしへおほしいつるにいなまめきゝよらにていみしう
なき給し御さまをそこはかとなくあはれとみたてまつり給ひし御おさな心もた

ゝいまの事とおほゆるにこみやすむ所の御ことなかきつらねあはれにおほされてたゝかく

わかるとてはるかにいひしひとこともかへりてものはいまそかなしきとは

かりやありけむ御つかひのろくしなゝに給はすおとゝは御返をいとゆかしうおほせとえきこえ給はす院の御ありさまは女にてみたてまつらまほしきをこの御けはひもにけなからすいとよき御あはひなめるをうちはまたいといはけなくおはしますめるにかくひきたかへきこゆるを人しれすものしとおほすらむなとにくき事をさへおほしやりてむねつふれ給へとけふになりておほしとゝむへき事にしあらねはことゝもあるへきさまにのたまひをきてむつまじうおほすりのさい将をくはしくつかうまつるへくの給て内にまいり給ぬうけはりたるおやさまにはきこしめされしと院をつゝみきこえ給て御とふらひはかりとみせ給へりよき女房などはもとよりおほかる宮なれはさとかちなりしもまいりつとひていとなくけはひあらまほしあはれおはせましかはいかにかひありておほしいたつかましとむかしの御心さまおほしいつるにおほかたのよにつけてはおしうあたらしかりし人の御ありさまそやさこそえあらぬものなりけれよしありしかたはなをすくれてものゝおりことに思ひいてきこえ給ふ中宮もうちにそおはしましけるうへはめつらしき人まいり給ときこしめしければいとうつくしう御心つかひしておはしますほとよりはいみしうされおとなひ給へり宮もかくはつかしき人まいり給を御心つかひしてみえたてまつらせ給へときこえ給けり人しれすおとなははつかしうやあらむとおほしけるをいたうよふけてまうのほり給へりいとつゝましけにおほとかにてさゝやかにあえかなるけはひのしたまへれはいとおかしとおほしけりこき殿には御らむしつきたれはむつまじうあはれに心やすくおもほしこれは人さまもいたうしめりはつかしけにおとゝの御もてなしもやむ事なくよそほしければあなつりにくゝおほされて御とのゐなとはひとしくしまへとうちとけたる御わらはあそひにひるなとわたらせ給ことはあなたかちにおはします権中納言は思心ありてきこえ給けるにかくまいり給ひて御むすめにきしろふさまにてさふらひ給をかたかにやすからすおほすへし院にはかのくしのはこの御返御らんせしにつけても御心はなれかたかりけりそのころおとゝのまいり給へるに御物かたりこまやかなりことのついでに齋宮のくたり給し事さきゝもの給いづれはきこえてたまひてさ思ふ心なむありしなとはえあらはし給はすおとゝもかゝる御けしききゝかほにはあらてたゝいかかおほしたるとゆかしさにとかうかの御事をの給ひいつるにあはれなる御けしきあさ

はかならすみゆれはいとくおしくおほすめてたしとおもほしゝみにける御か
たちいかやうなるおかしきにかとゆかしう思ひきこえ給へとさらにえみたてま
つり給はぬをねたうおもほすいとをもりかにて夢にもいはけたる御ふるまひな
とのあらはこそをのつからほのみえ給ふついてもあらめ心にくき御けはひのみ
ふかさまされはみたてまつり給ふまゝにいとあらまほしとおもひきこえ給へり
かくすきまなくてふたところさふらひ給へは兵部卿宮すかゝともえおもほし
たゝすみかとをとなひ給ひなはさりともしえおもほしすてしとそまちすくし給ふ
た所の御おほえともとりくいにいとみ給へりうへはよろつの事にすくれてゑを
けうある物におほしたりたてゝこのませ給へはにやになくかゝせ給齋宮の女御
いとおかしうかゝせ給へければこれに御心うつりてわたらせ給つゝかきかよは
させ給殿上のわかき人くもこの事まねふをは御心とゝめておかしきものにお
もほしたればましておかしけなる人の心はへあるさまにまほならすかきささひ
なまめかしうそひふしてとかくふてうちやすらひ給へる御さまらうたけさに御
心しみていとしけうわたらせ給てありしよりけに御おもひまされるを権中納言
きゝ給てあくまでかどくしくいまめきたまへる御心にて我人におとりなむや
とおほしはけみてすくれたる上すともをめしとりていみしくいましめて又なき
さまなるゑともをになきかみともにかきあつめさせ給ものかたりゑこそ心はえ
みえて見所あるものなれとおもしろく心はへあるかきりをえりつゝかゝせ給
れいの月なみのゑもみなれぬさまにことの葉をかきつゝけて御らんせさせ給わ
さとおかしうしたれば又こなたにてもこれをこらむするに心やすくもとりいて
給はすいといたくひめてこの御かたへもてわたらせ給をおしみらうしたまへは
おとゝきゝたまひて猶権中納言のみ心はへのわかくゝしさこそあらたまりかた
かめれなとわらひ給あなちにかくして心やすくも御らんせさせすなやましき
こゆるいとめさましやこたいの御ゑとももの侍るまいらせむとそうし給てどのに
ふるきもあたらしきもゑともいりたる御すしともひらかせ給て女君ともろとも
にいまめかしきはそれくといえりとゝのへさせ給長恨歌王昭君などやうなるゑ
はおもしろくあはれなれとことのいみあるはこたみはたてまつらしといえりとゝ
め給ふかのたひの御日記の箱をもとりいてさせ給てこのついでにそ女君にもみ
せてたまつり給ひける御心ふかくしらていまみむ人たにすこしもの思ひしらむ
人は涙おしむましくあはれなりまいてわすれかたくそのよの夢をおほしさます
おりなき御心とともにほとりかへしかなしうおほしいてらるいまゝてみせ給は
さりけるうらみをそきこえ給ける

ひとりゐてなけしよりはあまのすむかたをかくてそみるへかりけるおほ
つかなさはなくさみなましものをとの給いとあはれとおほして

うきめみしそのおりよりもけふはまたすきにしかたにかへる涙か中宮はか

りにはみせたてまつるへきものなりかたはなるましき一てうつゝさすかにうら
／＼のありさまさやかにみえたるをえり給ふついてもかのあかしのいゑるそ
まついかにとおほしやらぬ時のまなきかう絵ともあつめらるときゝ給て権中納
言いと心をつくしてちくへうしひものかさりいよく／＼のへ給ふやよいの十
日のほとなれは空もうらゝかにて人の心ものひものおもしろきおりなるにうち
わたりもせちゑどものひまなれはたゝかやうの事ともにて御方／＼くらし給ふ
をおなしくは御らむし所もまさりぬへくてたてまつらむの御心つきていとわさ
とあつめまいらせ給へりこなたかなたとさま／＼におほかりものかたりゑはこ
まやかになつかしさまさるめるをむめつほの御かたはいにしへのものかたりな
たかくゆゑあるかきりこき殿はそのころよにめつらしくおかしきかきりをゑり
かゝせ給へれはうちみるめのいまめかしきはなやかさはいとこよなくまされり
うへの女坊などもよしあるかきりこれはかれはなとさためあへるをこのころの
事にすめり中宮もまいらせ給へるころにてかた／＼こらむしすてかたくおもほ
す事なれば御をこなひもをこたりつゝ御らむすこの人／＼のとり／＼にろむす
るをきこしめしてひたりみきとかたはかたせ給ふむめつほの御かたにはへいな
いしのすけ侍従の内侍少将の命婦右には大弐の内侍のすけ中将の命婦兵衛の命
婦をたゝいまは心にくきいうそくともにて心／＼にあらそふくちつきともをお
かしときこしめしてまつものかたりのいてきはしめのおやなるたけとりのおき
なにうつほのとしかけをあはせてあらそふなよたけのよゝにふりにけることお
かしきふしもなければとかくやひめのこの世のにこりにもけかれすはるかに思ひ
のほれる契たかく神世の事なめればあさはかなる女めをよはぬならむかしとい
ふみきはかくやひめののほりけむ雲井はけにおよはぬことなれはたれもしりか
たしこのよの契はたけの中にむすひければくたれる人のことゝこそはみゆめれ
ひとついゑのうちはてらしけめともゝしきのかしこき御ひかりにはならはすな
りにけりあへのおほしかちゝのこかねをすてゝひねすみの思かた時にきえたる
もいとあへなしくもちのみこのまことのほうらいのふかき心もしりなからい
つはりてたまのえたにきすをつけたるをあやまちとなすゑはこせのあふみては
きのつらゆきかけりかむやかみからのきをはいしてあかむらさきのへうしし
たむのちくよのつねのよそひなりとしかけはゝけしき浪かせにおほゝれしらぬ

くに、はなたれしかと猶さしてゆきける方の心さしもかなひてつるに人のみか
とにもわか国にもありかたきさえのほとをひろめなをのこしけるふるき心をい
ふにゑのさまも、ろこしとひのもと、をとりならへておもしろき事とも猶なら
ひなしといふしろきしきしあをきへうしきなる玉のちくなり絵はつねのりては
みち風なれはいまめかしうおかしけにめもか、やくまでみゆみきはそのことは
りなしつきに伊勢物かたりに上三位をあはせてまたためやらすこれもみきは
おもしろくにきわ、しくうちわたりよりうちはしめちかき世のありさまをかき
たるはおかしう見所まさるへいなし

いせのうみのふかき心をたとらすてふりにしあとなみやけつへきよのつ

ねのあた事のひきつくろひかされるにをされてなりひらか名をやくたすへきと
あらそひかねたり右のすけ

雲のうへに思ひのほれるこゝろにはちいろのそこもはるかにそみる兵衛の

大君の心たかさはけにすてかたけれとさい五中將のなをはえくたさしとの給は
せて宮

みるめこそうらふりぬらめとしへにしいせをのあまのなをやしつめむかや

うの女ことにてみたりかはしくあらそふに一まきにことのはをつくしてえもい
ひやらすた、あさはかなるわか人ともはしにかへりゆかしかれとうへのも宮の
もかたはしをたにえみすいといったうひめさせ給おと、まいりたまひてかくとり
くゝにあらそひさはく心はへともおかしくおほしておなしくは御前にてこのか
ちまけさためむとのたまひなりぬかゝる事もやとかねておほしければ中にもこ
となるはゑりと、め給へるにかのすまあかしのふたまきはおほす所ありてとり
ませさせ給へり中納言もその御心おとらすこのころのよにはた、かくおもしろ
きかみゑをと、のふることをあめのしたいとなみたりいまあらためか、む事は
ほいなき事なりた、ありけむかきりをこそとのたまへと中納言は人にもみせて
わりなきまとをあけてか、せ給けるを院にもかゝる事きかせ給てむめつほに御
ゑともたてまつらせ給へりとしのうちのせちゑとものおもしろくけふあるをむ
かしの上すものとりくゝにかけるにえむきの御てつから事のこゝろか、せ給
へるに又わか御よの事もか、せ給へるまきにかの齋宮のくたり給しひの大こく
てんのきしき御心にしみておほしければかくへきやうくはしくおほせられてき
むもちかつかうまつれるかいといみしきをたてまつらせ給へりえんにすぎたる
ちむのはこにおなしき心はのさまなといいまめかし御せうそこはた、ことは
にて院のてんしやうにさふらふさこむの中將を御つかひにてありかの大こくて

んの御こしよせたる所のかうくしきに

みこそかくしめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせずとのみありきこえ給はさらむもいとカタしけなければくるしうおほしなからむかしの御かむさしのはしをいさゝかおりて

しめのうちはむかしにあらぬこゝちして神よの事もいまそ恋しきとてはな

たのからのかみにつゝみてまいらせ給御つかひのろくなといとなまめかし院のみかと御らんするにかきりなくあはれとおほすにそありし世をとりかへさまほしくおもほしけるおとゝをもつらしとおもひきこえさせ給けんかしすきにしかたの御むくひにやありけむ院の御系はきさいの宮よりつたはりてあの女御の御方にもおほくまいるへしないしのかむの君もかやうの御このましさは人にすぐれておかしきさまにとりなしつゝあつめ給その日とさためてにはかなるやうなれとおかしきさまにはかなうしなして左右の御系ともまいらせ給ふ女ほうのさふらひにおましよそはせてきたみなみかたくわかれてさふらふ殿上人は後涼殿のすのこにをのく心よせつゝさふらふ左はしたむのはこにすわうの花そくしきものにはむらさきちのからのにしきうちしきはえひそめのからのきなりわらは六人あか色にさくらかさねのかさみあこめはくれなるにふちかさねのをりものなりすかたやういなどなへてならすみゆ右はちむのはこにせむかうのしたつくゑうちしきはあをちのこまのにしきあしゆひのくみ花そくの心はえなどいまめかしわらはあを色にやなきのかさみ山ふきかさねのあこめきたりみなおまへにかきたつうへの女坊まへしりへとそうそきわけたりめしありてうちのおとゝ権中納言まいり給ふそのひそちの宮もまいり給へりいとよしありておはするうちにゑをこのみ給へはおとゝのしたにすゝめ給へるやうやあらむことくしきめしにはあらで殿上におはするをおほせことありて御こせむにまいり給ふこのはんつかうまつり給いみしうけにかきつくしたるゑともありさらにえさためやり給はすれいのしきのゑもいにしへの上すとものおもしろき事ともをえらひつゝふてとゝこほらすかきなかしたるさまたとへんかたなしとみるにかみゑはかきりありてやまみつのゆたかなる心はへをえみせつくさぬものなれはたゝふてのかさり人の心につくりたてられていまのあさはかなるもむかしのあとはちなくにきわゝしくあなおもしろとみゆるすちはまさりておほくのあらそひともけふは方くゝにけふあることもおほかりあさかれいのみさうしをあけて中宮もおはしませはふかうしろしめしたらむと思ふにおとゝもいというにおほえ給て所くのはむとも心もとなきおりくゝに時くさしいらへ給けるほどあらまほ

しきためかねてよにいりぬ左は猶かすひとつあるはてにすまのまきいてきたるに中納言の御心さはきにけりあなたにも心してはてのまきは心ことにすぐれたるをえりをきたまへるにかゝるいみしきものゝ上すの心のかきり思ひすましてしつかにかきたまへるはたとふへきかたなしみこよりはしめたてまつりて涙とゝめ給はすそのよに心くるしかなしとおもほしゝほとよりもおはしけむありさま御心におほしゝことゝもたゝいまのやうにみえところのさまおほつかなきうらゝいそのかくれなくかきあらはしたまへりさうのてにかなの所ゝにかきませてまほのくはしき日記にはあらすあはれなるうたなどもまされるたくひゆかしたれもことゝおもほさすさまゝの御ゑのけうこれにみなうつりはてゝあはれにおもしろしよろつみなをしゆつりてひたりかつになりぬ夜あけかたちかくなるほにもものいとおはれにおほされて御かはらけなとまいるついでにむかしの御ものかたりともいてきていはけなきほとよりかくもむに心をいれて侍しにすこしもさえなとつきぬへくや御らんしけむ院のゝたまはせしやうさいかくといふもの世にいとをもくする物なれはにやあらむいたうすゝみぬる人のいのちさいはひとならひぬるはいとかたき物になんしなたかくむまれさらてもひとにおとるましきほとにてあなちこのみちなふかくならひそといさめさせ給てほんさいのかたゝのものをしへさせたまいしにつたなき事もなく又とりたてゝこのことゝ心うる事も侍らざりきゑかくことのみなむあやしくはかなきものからいかにしてかは心ゆくはかりかきてみるへきとおもふおりゝ侍しをおほえぬやまかつになりてよものうみのふかき心をみしにさらに思やらぬくまなくいたられにしかとふてのゆくかきりありて心よりはことゆかすなむ思ふたまへられしについてなくて御らむせさすへきならねはかうすきゝしきやうなるのちのきこえやあらむとみに申給へはなにのさえも心よりはなちてならふへきわさならねとみちゝにものゝしありまねひ所あらむはこのふかさあさゝはしらねとをのつからうつさむにあとありぬへしふてとるみちと五うつことゝそあやしうたましゐのほとみゆるをふかきうなくみゆるをれものもさるへきにてかきうつたくひもいてくれといへこのなかには猶人にぬけぬる人なに事をもこのみえけるとそみえたる院の御せむにてみこたないしんわういつれかはさまとりゝのさえならはさせ給はさりけむその中にもとりたてたる御心にいれてうたへうけとらせ給へるかひありて文さいをはさるものにていはすさらぬ事の中には琴ひかせ給事なん一のさえにてつきにはよこふえひはさうのことをなむつきゝにならひ給へるとうへもおほしの給はせきよの人しかおも

ひきこえさせたるをゑは猶ふてのついでにすさひさせ給あたこと、こそおもひ給へしかいとかうまさなきまていにしへのすみかきの上すともあとをくらうなしつへかめるはかへりてけしからぬわさなりとうちみたれてきこえ給てゑひなきにや院の御ときこえいて、みなうちしほれ給ぬ廿日あまりの月さしいて、こなたはまたさやかならねとおほかたのそらおかしきほとなるにふんのつかさの御ことめしいて、わこむ権中納言給はり給ふさはいへと人にまさりてかきたてたまへりみこ箏の御ことおと、きんひは少将の命婦つかうまつるうへ人の中にすぐれたるをめして拍子給はすいみしうおもしろしあけはつるまゝに花の色も人の御かたちともほのかにみえてとりのさえつるほと心ちゆきめてたきあさほらけなりろくともは中宮の御かたより給はすみこは御そ又かさねて給はり給ふそのころのことにはこのゑのさためをしたまふかのうらくのまきは中宮にさふらはせ給へときこえさせ給ければこれかはしめのこりのまきまきゆかしからせ給へといまつきくるときこえさせ給ふうへにも御心ゆかせ給ておほしめしたるをうれしくみたてまつり給ふはかなきことにつけてもかうもてなしきこえ給へは権中納言は猶おほえをさるへきにやと心やましうおほさるへかめりうへの御心さしはもとよりおほし、みにければ猶こまやかにおほしめしたるさまを人しれすみたてまつりしり給てそたのもしくさりともおほされけるさるへきせちゑともにもこの御ときよりとすゑの人はいひつたふへきれいをそへむとおほしわたくしさまのかゝるはかなき御あそひもめつらしきすちにせさせ給ていみしきさかりの御世なりおと、そ猶つねなきものに世をおほしていますしおとなひおはしますとみたてまつりて猶世をそむきなんとふかくおもほすへかめるむかしのためしをみきくにもよはひたらてつかさくらゐたかくのほりよにぬけぬる人のなかくえたもたぬわさなりけりこの御世にはみのほとおほえすきにたりなかなきになりてしつみたりしうれへにかはりていまゝてもなからふるなりいまより後のさかへは猶いのちうしろめたししつかにこもりゐて後の世のことをつとめかつはよはひをものへんとおもほしてやまさとののとかなるをしめてみ堂をつくらせ給ひ仏経のいとなみそへてせさせ給ふめるにすゑの君たちおもふさまにかしつきいたしてみむとおほしめすにそとくすて給はむことはかたけなるいかにおほしをきつるにかといとしりかたし